

伝承

### 潮谷寺古佛の由来 (一)

御本尊阿弥陀如来の古伝説

会員 山石 田 善 市

この伝説は、潮谷寺へ佐伯市大字、浄土宗第十七世法譽上人これを書し、一部と下堅川沙月の旧家田井氏の先祖に贈られた。潮谷寺御本尊の由来について古文書である。阿弥陀如来像は現に潮谷寺の御本尊としておまつりされ、毎年旧曆十月のお十夜の日朗だけ御開帳があり、檀信徒の信仰があつく、その時は文字通り門前市となりて参拜人ではなう。

この阿弥陀如来像は、奈良朝時代の仏工法橋定朝の作だと伝えられ、美術的に見ても非常にすぐれた仏像で、副室級だといわれている。

浄土宗潮谷寺の本尊は土佐の国より御座被成候。いにしへ土佐表を船通候時、發込に出家一人むらゆらんを首に分け通る船に申すには、何國に行く船やと尋ね候時、此船は佐伯へ下る船なりといふ。佐伯へ行く船ならば便船可申と言ふ。

夫から其船に乗り、下り候延、佐伯へ下りすかゝある所にて、是よりあがるべしといふ。船子共こゝは船のつく所にてなし、是より一里程先古市と申す所船着にて候間夫違上り申さぬはあがる事はならずといふ。彼坊主のいふは、我はこれより上るなりとて、ひらゆらんを首にかけながら海へ飛び入り、蛇になりておまぎ、すかへ上り申候。彼すかを其より蛇濟と申由。

水夫共追々にあがり、彼蛇の行所へ追かけて見れば森の中へ追込申候。

塩月村森の中をせんぎして見れば何もない、そこにて祈る者に申候は、斯様々々の次第の蛇を此の森に追込み候も、若し以采如来堂と云此山の内にて見出し候れば、此年水夫共が申上つと云ふ伝へられ候へと申して彼者共かへり申候。

其翌年、山中に蛇の抜けからつぐらを作り、其の上は阿弥陀如来様ましますと見出し、さてもさてもふしが女事や、去年の今時分と覚え申候。水夫の荷袋が云ふたる仏なりとて互に見るところに、昆の方少し切れて七八割もわきへ有申候とひとつにたつめ、此蛇は只ならざる蛇なり、神下齋に申さんと云ひて、皆々其合点也。

其の時神にいはふ候とて、名もなき神はなし、何神と崇て可申哉といへば、其ノ中巧者なる者在りて、蛇と共に一つに齋にたれば、をなから大権現とあがめ可申といひて神にまつるとなり。

それよりあふた様は百姓の家にて香花をとり信心いたし候延、高柳へ飛在佐伯市高島庄の者、彼の塩月より右へ仏を所望して一人よろしく信心する所に、潮谷寺調山宮登上人、四代目登登上人と申す人右の譯を聞及び、高柳のものより所望して当寺の本尊と崇申すなり。然れば蛇濟といふ在所は此時より及じまり申候。備、つぐら作りたる下に刀走腰取りしを取って彼者が家につたへたる由、其の子孫亦木へ烟草あきないに行、喧嘩を仕出し、手板など仕つたるよし、尤無恙塩月村にかへりたるよし。

塩月村善右工門と申もの、其の子孫にて候よし。潮谷寺住持無恙して後住へ寺を授候時分は、此の物語代

代申依るもの也と、巖谷寺十一代明誓の物語りなり。  
（空曆十一年巳年六月十七日、七十八才城州代見空泉  
寺にて遷化）

右の次第並河氏の家に林柯集と申候一冊の本あり。  
其の中に當寺本尊様を譯其外養賢寺或は竟護寺観音の  
事共に相記しこれあり、一見の折から寫し候事如此。

又師道十六世真誓上人は、岸河内村の老人共申候ふ  
る由聞かれ候延、右の河内村如來を塩月村より岸河内  
の大願寺と申寺の本尊が安置奉り御供養し奉る所が、  
薩摩勢乱入る折から放火し、彼寺惣方一座の烟と上  
る。彼本尊を川中へなげ込し由、不思議なるが有被水  
尊、いづれまはかば山根なる大なる石の流れにのぞ  
みし、其の上平にして老丈四方持しあるべし、其の上  
に如來在せしよし。其れと又高畑の方へ迎へ奉りしよ  
し。夫より當時に移り玉ひし由、尤高畑に昔此寺あり  
し由、今現に寺の後に地蔵尊を安置す。彼岸河内村  
には大願寺ありし跡とて、今現に大なる竹籬となり、  
老幼皆依へて寺屋敷といふ。

南相転々として長く當寺に留り終ふも、定めて故ある  
べし、凡慮知る事を得ず、嗚呼佛神の所依強し。其の  
るべきものある也。己に神代には交斂自ら出現すと、  
憑かざるものは皆是とうたがふ。おべなるがやその心  
か及ばざるが致す所也。

皆にて今にて縁にふれずは神仏の靈妙不思議を  
顯す事一出。古伝如來の彼森の中へ在しませしその下  
に空斂一振自ら出現し在し有様言語同断、心行所感と  
唯疑いと去り深く信すべし。夫徳を得あり、疑は損あり、  
檀蓋誰か求めん。其の心あらんそのは時々歩を違  
ひ、現當共に祈り奉るは方とが御誓の空しからん。  
我等も現に此本尊に奉事す。當來は必定道を成ん

歡喜展べか左し、從來時の住職十夜の砌り、時を  
日から此事を申のべ、衆生の徳を増ししめ、  
本尊の本意も顯れはべし。又冥に神祇も悦び給は  
ん事うたがふべからず。

于寺享和三癸亥の年九月二十四日  
觀月窓下介及て書記し畢

巖雲山安養院巖谷寺十七世法誓

（注）① 瓜らゆたん 上列の如くふくき、ふらしきつ寝て衣類等と  
包むに用ゆる。

② 蛇濟 佐伯市蛇濟

③ 塩月村 蛇濟より三軒程上流、佐伯市塩月区

④ 七生から大権現 塩月鎮座長長神社

⑤ 百姓の家 塩月の心折長藏氏宅、善右衛門水子の先祖  
刀は珍寶して伝へず

⑥ 大願寺 佐伯市岸河内正地徳庵の前身、昔は土台地  
あり、今に寺屋敷と伝へられてゐる。

研究

佐伯の港はどんな衝きをしてゐるか

——主として木枝の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校教授 藤  
岡 校附主法シラフ顧問

木会会員 市野 順

仁

第二章 佐 伯 港

四 佐伯港における臨海工業の動向（つづき）